

私の思い



宮崎 勇

みやざき いさむ
1923年生、43年東京大学入学、同年12月学徒動員で海軍に。45年終戦で復員復学、47年卒業。47年経済安定本部入り後、経済企画庁、大和総研勤務。この間95年アジア女性基金設立の呼びかけ人。第三次村山内閣の経済企画庁長官。村山内閣退陣後、理事として基金参加。

いわゆる従軍慰安婦問題は、戦時中、軍の関与の下で多数の女性（少女から老女も含め）の名誉と尊厳を深く傷つけた問題ですが、アジア女性基金が設立される前から、私はこれら数多くの苦痛を経験され、心身にわたり癒したい傷を負われた方々に対し、日本国民及び日本国政府が事実問題として十分な謝罪も補償もしていないことに対して疑問と不満を持っていました。

それで、基金が設立される前のことですが、三木睦子夫人や安江良介氏（故人・岩波書店社長）が中心になって、従軍慰安婦問題の深刻さを国民に訴え、政府にいろいろ働きかけをする運動を企画され、私も安江さんからお誘いを受け、賛同者の一人となりました。

その運動が発足した直後から、政府内部でアジア女性平和基金の構想が打ち出され、私もその呼びかけ人の一人となりました。さきの安江さんの構想と同じような趣旨で、二足のわらじをはくのも構わないと考えたのですが、「女性基金」の方に漸次重点を置くようになりました。それはどちらかといえば「完全主義」を指す安江

さんの構想は素晴らしいのですが、どうも設立に時間がかかりすぎる。それに比べると、政府構想は「理想型」ではないけれど、従軍慰安婦の方々が高齢のため、次々に亡くなる方が増えている状況から見ると、討論するよりもとにかく設立を急ぐ政府の構想の方が現実的では、と考えたからです。そして、私は組織作り、人集め、資金集めに和田春樹さん、大鷹淑子さんはじめ呼びかけ人の方々と手分けして運動をはじめました。

女性基金が正式に発足（九五七年七月一九日）するとともに、理事長に原文兵衛前衆議院議長が就任され、私も原さんから直接話があつて基金に参加することになりました。ところが八月に村山内閣が改造され、私は経企庁長官として入閣することになりましたので、正式に基金の理事として参加したのは村山内閣が九六年はじめに退陣してからのことでした。最初は経済界から資金協力を得る仕事でしたが、バブルがはじけたあとだけに、苦労の多い仕事でした。

こうして私は基金とのかかわりを持つことになったのですが、最初に受けた精神的なショックは、和田さんと一緒に韓国の従軍慰安婦と会ったときのことです。

もちろん、私は当時、従軍慰安婦であつた方々には十分な謝罪とそれなりの補償をすべきことは当然のことと思っていました。そして補償金額も多いほどよく、そうすれば従軍慰安婦であつた方々も、何程かは（百パーセントではないにしても）納得していただけるのではないかと思っていました。それで、予算や手続きなどのこともあり、一体慰安婦の方々にどんな具体的な要求があるのだろうかと考え、「ところで、取りあえず私たち（基金）にどんな具体的な注文なり要望があるのでしょうか」と尋ねてみました。私は心中「コトバや補償金額の問題ではありません。日本側の誠意ある行動が欲しい」というような返事が返ってくるのでは………と思ったのです。ところが、彼女たちから出てきた言葉は「何も要りません。ただ私の青春を返して下さい」という言葉でした。

私は一瞬、息のみ、言葉も出ませんでした。この元従軍慰安婦の一言が、非力な私の基金活動の源泉であり、いまもそのときのショックが明白によりがえりません。